

# 高校教科福祉における他校生徒とのピア・ラーニングの効果検証

角谷 道生\* ・ 大日方 真史\*\*

Verification of peer learning with other students in high school subject welfare

KAKUTANI MICHIO and OBINATA MASAFUMI

## 要 旨

筆者（角谷）は角谷道生・森脇健夫（2019）、（2020）において、所属校生徒が、タブレットを用いて、社会保障等に関する学習素材（以下：「授業」）を作成し、他校教員が「授業」を他校生徒に実施し、他校生徒のワークシートやレビュー（ピア・レビュー）を通して、生徒が活動全体をふりかえることが、生徒の学習にどのような効果があるのかを、「主体的・対話的で深い学び」に即して検証した。その中で、他校生徒から、自分たちも学習素材を作成したいという意見が出された。

そこで本研究では、福祉を学ぶ筆者の所属校生徒と、同じ福祉を学ぶ他校生徒が、自校の授業で学んだ知識をもとに、タブレットを活用し学習成果等を相互に発受信し、評価や感想を交換する「ピア・レビュー」を行う学習サイクル「ピア・ラーニング」が、どのような効果があるのかを検証した。検証方法としては、新高等学校学習指導要領にある高校教科福祉の3つの資質・能力を、福祉に関する知識・技能の習得、福祉に関する課題の発見と解決能力、主体的・協働的に取り組む態度の涵養と捉え検証した。

本研究の活動として2回実施した。1回目は、生徒と他校生徒が自校の授業で学んだ知識をもとに、3～4名のグループになり、タブレットを活用し福祉や介護に関する知識を整理したスライドを作成した。その後、発受信し、評価や感想を交換した。2回目は、生徒と他校生徒が自校で夏季休業期間中に行った、介護実習での体験をもとに、3～4名のグループになり、タブレットを用いて事例のスライドを相互に作成した。その後、発受信し、評価や感想を交換した。

結果として、1回目活動では、福祉や介護に関する知識・技能の向上は見られたが、福祉の見方・考え方を広げ深めながら、課題を発見し、解決策を創造する姿があまり見られなかった。2回目の活動では、事例に対する考え方を交流することで、これまでの学びが異なる生徒同士だからこそ得られる気づきを通して、自分たちが持つ正しさを問い直し、福祉や介護に関する見方・考え方の広がりや深まりが見られ、特に課題の発見や解決策を創造しようとする姿が両校の生徒に見られた。また、2つ活動全体を通して、顔が見えない対等な立場からの率直な意見の交換により、グループ内での協力体制の強化や、他者を意識したわかりやすさの追求が見られ、主体的・協働的に取り組む様子も見られた。

キーワード：高等学校、福祉、ICT、ピア・レビュー、ピア・ラーニング

## 問題の提起

筆者（角谷）は、高等学校で教科「福祉」を担当している。2020年現在、三重県内に福祉を学ぶことができる高等学校は14校ある。しかし、そのうち10校は、

1学年10人前後の生徒数である。教科福祉は、生活課題を扱う科目であり、多様で質の高い福祉サービスを提供するためには、様々な専門職種の人と連携を取りながら、個別的な課題を多面的に捉え解決する力が求められている。生徒数が少ない高校教科福祉において

\* 三重県立明野高等学校

\*\* 三重大学教育学部

は、課題解決型の授業を行い、レポートにまとめるなど、少人数ならではの手厚い指導は可能である。しかし、多様な意見にふれ、学びを広げ深めることや、他者と協働して課題に取り組むことには困難さがある。

そこで、筆者の所属校の福祉を学ぶ生徒がタブレットを用いて、福祉に関する学習素材を作成し、他校の福祉を学ぶ高校生に発信、他校生徒のワークシートやレビュー（ピア・レビュー）を通して、生徒が活動全体をふりかえることが、生徒の学習にどのような効果があるのかを、「主体的・対話的で深い学び」に即して検証してきた（角谷道生・森脇健夫 2019、2020）。ピア・レビューとは本研究で筆者が用いる言葉であり、「生徒が、自分たちと同じ立場である福祉を学ぶ他校の高校生から、学習成果や感想・評価を受け取る活動（角谷・森脇 2019）」である。

これらの研究により、生徒が他校生徒を意識しながら、主体的に学習素材を作成し、他校生徒のワークシートやレビューから、福祉に関する知識の理解を深めたり、自ら作成した学習素材の課題を明らかにしたりするなどの効果が見られた。しかし、所属校の生徒は、学習素材を作成するが、他校生徒は、それを実施し、評価・感想を返すだけであった。その結果、他校生徒が得るものが、所属校生徒に比べ少なくなってしまう、他校の教師からも、「自分たちも学習素材を作りたい」という声が生徒からあがったという報告を受けた。

他校生徒との学び合いの先行研究として、田代 久美・成田 忠雄（2002）がある。田代・成田（2002）は、「仙台市内の4つの小学校と2つの中学校がそれぞれ展開したバリアフリーをテーマにした総合学習の教育実践の記録を基に、その中で各種情報機器とマップ型学習調査システムがどのように利用され、それによりどのような学習効果が得られたか、またメディアを通じた他校との交流が子どもの学習にどのような影響を与えるのか」について検証している。結果として、「学校ごとに学習の内容や取り組んだ学年が違い、またパソコンの台数やスペック、操作に対する習熟度にも違いがあったが、このシステムを利用することにより子どもたちは学年や学習時間の差を越えて視点と情報を共有し学習を発展させることが可能になった」と述べている。しかし、他校の生徒同士が互いに学習素材を作成し、学び合う活動の研究は数が少なく、その効果が十分に明らかにされているとはいえない。

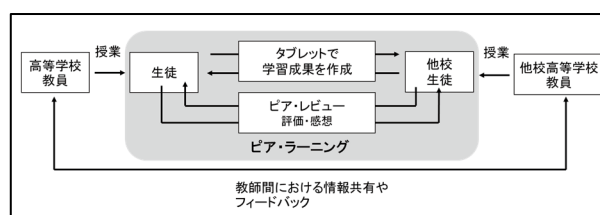
研究数が少ない要因として、教科福祉のように生徒数が10人前後という学習環境にある教科が少ないことがある。生徒数が40人前後いる学習環境であれば、その中で多様な意見にふれ、学びを広げ深めることや、他者と協働して課題に取り組むことも行いやすい。そのため、他校生徒との学び合いを行う必要性があまり感じられないのではないかと。しかし、今後全国的な生

徒数の減少が予想され、地方では1学年1桁の生徒数という深刻な少子化が進む中で、他校生徒との学び合いの必要性は増していくのではないかと。

## 本研究の目的と方法

本研究では、福祉を学ぶ筆者の所属校生徒（高校2年生18名 以下：生徒）と同じ福祉を学ぶ他校生徒（高校3年生11名 以下：他校生徒）が、自校の授業で学んだ知識をもとに、タブレットを活用し学習成果等を相互に発受信し、評価や感想を交換する「ピア・レビュー」を行う学習サイクル「ピア・ラーニング」が、どのような効果があるのかを検証する（図1）。ピア・ラーニングとは、本研究で筆者が用いる言葉であり、「対等な立場間の学び合い」のことを指す。今回のピア・ラーニングの具体的な内容は、福祉を学ぶ生徒が同じ福祉を学ぶ他校生徒に学習成果等を相互に発受信し、評価や感想を交換するというピア・レビューを相互に行う活動とする。

図1. 本研究の概要図



## 実施内容

本研究の活動として2回実施した。1回目は、生徒と他校生徒が自校の授業で学んだ知識をもとに、3～4名のグループになり、タブレットを活用し福祉や介護に関する知識を整理したスライド（表1-1. 所属校生徒が作成したスライドの概要、表1-2. 他校生徒が作成したスライドの概要、図2. 所属校生徒が作成したスライドの概要）を作成した。その後、発受信し、評価や感想を交換した（平成31年4月から令和元年7月）。評価と感想については、筆者が作成した評価・感想シートを用いた。評価の観点として、相手校のスライドを見て良かった点と課題・改善可能な点の2点を生徒と他校生徒が自由に記述できるものとした（表1-3. 1回目所属校生徒・他校生徒が記載した相手校のスライドを見た評価の概要）。また、感想として、相手校からの評価を読んだ後に、活動全体を通して気づいたことを生徒と他校生徒が自由に記述できるものとした（表1-4. 1回目所属校生徒・他校生徒が記載した活動全体を通じた感想の概要）。生徒と他校生徒が記入した評価・感想シートは、生徒と他校生徒の名前を伏

せた形で相手校に返した。

2 回目は、生徒と他校生徒が自校で夏季休業期間中に行った、介護実習での体験をもとに、3～4 名のグループになり、タブレットを用いて事例のスライド（表 2-1. 所属校生徒が作成した事例スライドの概要、表 2-2. 他校生徒が作成した事例スライドの概要、図 3. 事例のスライドの概要）を相互に作成した。事例のスライドの詳細について後述する。その後、発受信し、評価や感想を交換した（令和元年 9 月から令和 2 年 1 月）。評価の観点として、事例のスライドを見て、気づいた点とこれから自分が介護をする中で活かせるような点の 2 点を生徒と他校生徒が自由に記述できるものとした（表 2-3. 2 回目所属校生徒・他校生徒が記載した相手校の事例スライドを見た評価）。また、感想として、相手校からの評価を読んだ後に、活動全体を通して気づいたことを生徒と他校生徒が自由に記述できるものとした（表 2-4. 2 回目所属校生徒・他校生徒が記載した活動全体を通じた感想の概要）。

評価の観点を 1 回目と変更した理由は、考察にて詳細を述べるが、1 回目の評価では、スライドの見やすさやわかりやすさに対するものが多く見られ、教科福祉ならではの福祉や介護の見方・考え方の広がりや深まりを記述内容からは得ることができなかったことがある。そこで、2 回目は、事例のスライドを見て、考えることを通して、どういった気づきがあり、それがこれから福祉や介護に携わる中でどのように活かせるのかという観点で記述することで、作成した事例がどのような影響を与えたのかを評価として相手校に返すこととした。感想については、1 回目と同様にした。なお、事例のスライドを作成するにあたっては、山田康彦 他 8 名（2018）が考案した対話的事例シナリオを参考に、事例のスライドの構造を、1. 実習先であった出来事を提示。2. よくある対応を 3 つ提示。3. それぞれの対応に対する批判を提示。4. 3 つの選択肢の中から、自分たちが選んだものを根拠とともに提示。5. これから自分たちは何を大切にどうしていきたいかを提示。という形を基本とした。

表 1-1. 所属校生徒が作成したスライドの概要

タイトル	概要
コミュニケーションの比較	非言語コミュニケーションの効果について、ペアワーク等を用いて伝える。
緑の効果について	緑色が人にも与える好ましい側面と好ましくない側面を提示し、緑色と上手に付き合う考えを提案。
糖尿病について	糖尿病の概要と予防方法を提示。
児童について	海外のストリートチルドレンについて紹介し、日本においてもそれに近い状況虐待や貧困があることを提示。
介護現場でよく発生する事故とは	介護現場で発生する事故と予防法を提示。

表 1-2. 他校生徒が作成したスライドの概要

タイトル	概要
ココロを健康にする心理学とは	マインドコントロールについて紹介し、日常生活とのつながりについて提示。
死について	子どもが死に向かうにあたり、周りができることを提示。
食事の介助	食事介助の意義と目的を提示。
T高校の福祉	T高校での授業内容や実習・校外活動を紹介

図 2. 所属校生徒が作成したスライドの概要





① <b>コミュニケーションの比較</b> ～言語的コミュニケーション？非言語的コミュニケーション？～	② <b>やってみよう！！</b> ● 実際に二人一組で A さん、B さんに分かれてみよう！ ● A さんは是非話しかけたことを B さんに話してください。B さんは B さんが話しかけたことを A さんに話してください。 ● 30 秒で交代してください！！ 
③ <b>実際にやってみてどうでしたか？</b>	④ <b>言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションとは？</b> ● コミュニケーションには言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションがある。 ● 言語的コミュニケーションは言葉を使って相手に伝えることを言い、この場合、声に出した言葉の意味と発音者の心情が相手に伝わる。 ● 一方、言葉は使わなくても、ジェスチャーや会話を相手に伝えるのは心づいて伝える場合がある。これを非言語的コミュニケーションという。 参考：介護用語辞典 <a href="http://www.dogwood.com/kyogendo.html">http://www.dogwood.com/kyogendo.html</a>
⑤ <b>感情、表現の割合</b> ● 7%が言語＋38%が音声＋55%が表情である。  ● 92%の割合で非言語的コミュニケーションのほうに重点的に受け止められる。 参考：介護用語辞典 <a href="http://www.dogwood.com/kyogendo.html">http://www.dogwood.com/kyogendo.html</a>	⑥ <b>言語的、非言語的に分けてみよう</b>  参考：コミュニケーション技術
⑦ <b>答えはこれです！</b> 	⑧ <b>まとめ</b> ● 非言語的コミュニケーションは、友達や家族と話す時、相手に心から話しているか表情から伝わることもできます。 ● 現在は、友達との人間関係や対人関係が難しいと言われるので、人のことを考え行動したり、言葉を使ったりすることが大事だと私たちは考えています。そうすることで、人間関係が良くなり、良い生活を送ることができるといえます。 ● これから、言語的コミュニケーションだけでなく非言語的コミュニケーションも、とても大事になってくるといえます。

表 1-3. 1 回目所属校生徒・他校生徒が記載した相手校のスライドを見た評価の概要

評価の観点	評価として記載内容の概要
所属校生徒	良かった点 興味を引くテーマが多かった。 新たな知識を得たことで、興味関心が広がった。 スライドの見にくさ。色の使い方・文字の大きさ・量 コピーみたいなのがいろいろ感じた。 全体を通してなぜこうなのかという「つなぎの文」が少なかった。急に違う内容が出てきてわかりにくかった。 最終的に何が伝えたいのかわからないことが多かった。
他校生徒	良かった点 知らなかったことを知ることができた。 しっかりまとめられていた。 身近に感じられる題材で興味がわいた。 課題改善可能点 文ばかりでわかりにくい。 図がわかりにくい。 もっと簡単に説明してほしい。

表1-4. 1 回目所属校生徒・他校生徒が記載した活動全体を通した感想の概要

	感想として記載された内容の概要
所属校生徒	感想をもらうことで、自分たちだけでは気づけなかったスライドの反省点や良い点を見つけることができた。スライドを見る側も作る側も新たな知識が身につくとも楽しかった。
他校生徒	他校の意見をもらうことで、自分たちでは気づけないスライドのわかりにくい点に気づけた。今回はスライドの作成時間が短く満足いくものができなかった。次回は同じぐらいの時間をかけて、他校も自分も満足いくものを作りたい。

表2-1. 所属校生徒が作成した事例スライドの概要

タイトル	事例の概要
見当識障害について	時間・場所・人がわからなくなる見当識障害のある方が「家に帰って草引きしたい」と何度も言われる。
聴覚障害と収集癖	耳が全く聞こえず、コミュニケーションがとりにくい方が、自室に洗っていないゼリーやプリンを容器を大量に集めている。
職員さんへの対応	複数の職員さんから異なる指示を出された時、実習生としてどうすればいいのか。
トイレ事例	数分に1回のペースで「トイレに連れて行ってほしい」と言われる方がいる。
うどんが食べたい	嚥下機能が低下している方が、「コシのあるうどんが食べたい」と言われた。

表2-2. 他校生徒が作成した事例スライドの概要

タイトル	概要
Aさんの日常	自宅に帰りたいと何度も訴え、周りの方と関わりを持ちたがらない方が、入浴を拒否される。
アンパンマン	障がい者のディサービスに、アンパンマンという言葉を知ると、とても嫌がる方がいる。
おしゃべり好きな利用者さんについて	職員や実習生に話を聞いてもらいたくて仕方がない方がいる。
実習での出来事	アルツハイマー型認知症のある方が、何度も同じ話をします。

図3. 事例のスライドの概要


① 聴覚障害と収集癖	② ．ある福祉施設に入所しているAさんは、こだわりが強く、 <b>収集癖</b> があります。また、 <b>金ろう</b> （金くちが聞こえない）で、筆談も出来ず、手話もわかりません。なので、普段は職員さんとはジェスチャーでコミュニケーションをとっています。 ．収集癖については次のスライドで説明します。
③ 収集癖とは	④ 事例 ．ある日、Aさんの居室に入ると、ヨーグルトやプリンのカップが集められているのを見つけました。そのカップは洗われていない為、残っていたものが腐って、臭いが漂う可能性があります。 
⑤ ．このようなことが起きたら、あなたはどうしますか？ ．下記の選択肢から一つ選んでください。	⑥ ．選択肢1を選んだ結果このようなことになる可能性がありますが、あなたはどうしますか？ ．(1) 勝手に捨てたことを認めてしまう。 ．(2) Aさんに健康被害が生じる可能性がある。 ．(3) ジェスチャーで伝えてみたが、十分に伝わらなかったように、ボカンとしている。
⑦ 回答例 ．私達は (3) を選びました。 ．収集癖は、 <b>強さを抑えるため</b> の理解があります。このことから、Aさんは聴覚障害で周りとのコミュニケーションが取れずに孤独を感じていると考えられます。なので、無理に片づけたり、本人抜きで解決するのではなく、Aさんと相談し、納得していただいた上で片づける必要があると考えました。また、信頼関係やAさんの尊厳を傷つける可能性があるため、Aさんに断罪で片づけることは避けた方がいいと思います。	⑧ 最後に 私達は聴覚障害と収集癖についての事例を作成しました。このように複数の障害を抱えている利用者さんをもいるため、知識を広く持ておくことが大切ですが、もしあると、利用者さんを正確に把握できていないかもしれない。しっかりと利用者さんを見るのが大切だと思います。もし今後このような症状を持った方と関わる可能性がある際には、この事例を通して皆さんに伝えていきたいです。また、この人だけに限った話ではないので、目の前の利用者さん、一人一人をしっかりと見ていきたいです。利用者さんに寄り添い、尊厳を大切にしたい関係です。そうすることによって利用者さんは安心して暮らしていけると思います。

表2-3. 2 回目所属校生徒・他校生徒が記載した相手校の事例スライドを見た評価の概要

評価の観点	評価として記載された内容の概要
所属校生徒	事例を通して気づいたこと 全ての事例の中に、形は違っても、信頼や安心感を利用者さんにどのように伝えていけばよいかが共通してあった。自分の体験した内容の事例もあり、とても共感できた。何の選択が正しいのではなく、その時の状況、その利用者さん、そして介護者側のそれぞれの性格などにあったその時の適切な対応をするのが正しいのだと思いました。
他校生徒	これから活かそうなこと 個々に合わせた介助を意識したい。そのために個人を理解したい。その時の状況や利用者さんの性格、介護する側の自分の考えなどを含めて一人で考えるのではなく、様々な人の意見を聞く。 事例を通して気づいたこと 自分が知らない知識を知ることができた。自分の他人の意見の合っているところや違いがあって、様々な意見があることを知ることができた。利用者さんの体と気持ちの両方を大切にすることが難しいと改めて思った。 これから活かそうなこと 色々な意見があることがわかったが、その上で自分の意見も言えるようになりたい。実際の介護現場で様々な考えをもって考えていきたい。どの場面でもどの職業でも説明と工夫が大切だと思った。

表2-4. 2 回目所属校生徒・他校生徒が記載した活動全体を通した感想の概要

	感想として記載された内容の概要
所属校生徒	同じ高校で同じ授業を受けていると自然と事例に対する回答が似てしまうが、他校は私たち違う環境で学んでいるので、今回もらった意見や考えはとても新鮮で、視野が広がった。 ダメなところを言ってくれるので、どうしたら伝わるかを考えるようになった。全然感想を書いてくれない人もいたが、もしかしたら、自分たちの作ったものが、その人にはわかりにくかった可能性もあるので、そういったところも見直すポイントなのかなと思った。 前回、自分たちが書いた感想やアドバイスをしっかり読んでもらったのか、前回よりとても良くなっていった。お互い成長しているのがわかる。
他校生徒	別の高校から違う意見をもらうことで、自分の考えていなかったことを知ることができ、そこから自分の意見も変わることもあったので、深く考えることができた。そうすることで、利用者さんのためになると思う。 顔も知らない中の交流だから、お互いが何も隠さず言い合える点はすごくいい部分だと思った。自分たちが正しいと思っていることが間違っていることもあるので、それを指摘してもらえるのはとてもよかった。 同じ学校同士の人ならわかることでも、別の高校の人にはわからないから、どうしたらうまく伝わるか、理解してもらえるかなど工夫できるようになった。 事例を共有したことで、考え方や視野が広がった。

## 考察

ここで、生徒と他校生徒が作成したスライドや評価・感想を参考に、全体の傾向を概観する形で本研究の効果を検証していく。

### 1-1 1 回目の活動の考察

1 回目の活動では、生徒と他校生徒が自校の授業で学んだ知識をもとに、3~4 名のグループ（所属校生徒 5 グループ、他校生徒 4 グループ）になり、タブレットを活用し福祉や介護に関する知識を整理したスライドを作成した。それに対する両校の生徒が記述した評価や感想の中には、教師が生徒に伝えることに躊躇す



るようなスライドの見やすさやわかりにくさに関する率直で厳しい意見（この文章では何が言いたいのかわからない。スライドのどこを見ればよいかわからない。など）の記述があった（29名中28名）。その厳しい意見を両校の生徒にそのまま提示すると、当初は不快に感じながらも、記載された内容を受け止め、次回に活かそうとする姿が見られた。同じ学校内のクラスメイトから、厳しい意見を言われると、その後の人間関係に影響を与えることがある。しかし、他校であればその影響は少ない。また、指摘された点の1つである文章のわかりづらさやスライドの見づらさなどは、個人で修正するより、複数人で確認の方が改善しやすい。そのためグループ間での協力体制が強化され、今回はよりよいスライドを作りたいという意欲にもつながった。これは、両校の生徒の感想の記述にも現れており、対等な立場間の学び合いであるピア・ラーニングの一つの効果といえる。

課題としては、評価や感想の内容が、スライドの見やすさやわかりやすさなど、スライドの出来不出来が中心になっていることがある（29名中29名）。この要因として、筆者が作成した評価・感想シートがスライドを見て良かった点と課題・改善可能な点について記述するようになっていくことがある。筆者の意図としては、良かった点として、相手校のスライドを見ることで、福祉や介護に対する興味関心が広がったり、既知の確認や深まりが生まれたりといったことが書かれることを期待していた。また、課題・改善可能な点としては、説明不足や不明な部分について、どういった参考文献を追加すると良いかなど、テーマがより深まるためのアドバイスが書かれることを期待していた。結果としては、少数の生徒（29名中3名）の記述内容の一部に、興味関心が広がったなどの記述が見られたが、テーマがより深まるためのアドバイスに関する記述は見られなかった（29名中0名）。この結果は、良かった点と課題・改善可能な点という表現では、スライドや、その作成方法に関して問われていると、多くの生徒たちに捉えさせてしまった可能性を示している。わかりやすいスライドを作成することは、自分の伝えたいことを正確に伝えるためにも必要なものである。しかし、教科福祉ならではの福祉や介護に対する考え方を広げたり、深めたりといったものが今回はあまり見られなかった。

## 1-2 2回目の活動の考察

2回目の活動では、それぞれの生徒が自校において夏季休業中に実施した介護施設等での実習による体験をもとにした事例スライドを作成することにした。その理由として、福祉や介護の見方や考え方を広げ深めるために対話ができる状況をつくることに重点をおい

たことがある。高等学校学習指導要領（2018）によると、教科福祉における「見方・考え方」とは、「生活に関する事象を、当事者の考えや状況、環境の継続性に着目して捉え、人間としての尊厳の保持と自立を目指して、適切かつ効果的な社会福祉と関連付けることを意味している。（文部科学省 2018「高等学校学習指導要領解説 福祉編」p12）」とされている。これは、人間としての尊厳の保持と自立を実現するためには、福祉や介護の知識とその人の生活を多面的に捉えることが必要であることを示している。物事を多面的に見るためには、他者との対話が効果的である。中央教育審議会答申（2016）は、「対話的な学び」の中で、「身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる」と述べている。1回目の活動では、筆者が作成した評価・感想シートの内容がスライドの是非に終始する形に生徒を誘導してしまった可能性があるが、授業での学びをもとにスライドを作成したため、知識の伝達が中心になっていた点もある。新たな知識を伝達することで、両校の生徒の知識量は増加したが、知識の伝達だけでは、多様な表現を出し合い、対話につなげることは困難である。そこで、唯一無二の正解がない、介護施設等での実習による体験を事例スライドとして作成することで、多様な表現を出し合い、事例・相手校生徒・同校生徒・自分自身・教師との対話が生まれやすくなることにした。

事例を作成するにあたっては、山田康彦 他 8 名（2018）が考案した対話的事例シナリオを参考にした。対話的事例シナリオとは、教師養成を目的とした授業方法として考案されたものである。まず事例を提示し、事例・自分・他者・授業者等との対話を通して、対応策や解決策だけでなく、問題の所在を明らかにしたり、物事に対する見方・考え方を広げ・深めたりしていくものである。その構成は、1. 事例シナリオの提示 2. 定説の提示 3. 定説に対する批判 4. 定説にかわる実践例の提示の4つの段階から授業が構成されている。これらは、大学生を対象に大学教員によって作成されたものである。そのため、生活経験や福祉や介護現場における経験が少ない高校生には、受講者として事例シナリオの授業に取り組む点と、スライド作成者として事例シナリオを作成する点において、難しいものがある。そこで、事例シナリオを高等学校の教科福祉に取り入れた、角谷（2020）を引用・修正し、事例のスライドの構造を、1. 実習先であった出来事を提示。2. よくある対応を3つ提示。3. それぞれの対応に対する批判を提示。4. 3つの選択肢の中から、自分たちが選んだものを根拠とともに提示。5. これから自分たちは



が見えない対等な立場からの率直な意見により、生徒が不快になり、活動そのものに取り組まなくなる可能性がある。今回の活動に見られたものとして、相手校からの意見や評価・感想が少なかったり、内容が薄かったりすることに対して、「自分たちは一生懸命にしているのに、こんなに感想が少ないと悲しくなるし、やる気をなくす」などの不満を感じている生徒がいた。今回は結果的に、生徒たちはそれらの意見からも「自分たちの作ったものがわかりにくかった可能性もある」など得られるものを探し、受け止め、次の活動に活かそうとしたり、グループ内での協力体制が強化されたり姿が見られた。しかし、率直な意見が相手の人格を否定するものになっていないか、生徒自身が確認して意見を出せるよう教師側の配慮が必要である。具体的には、スライドや事例の内容や意見に対する批判であっても、作成者の人格を批判・否定するものにならないように、意見や評価・感想を書くように生徒に伝え、確認する時間を取ることがある。このような配慮は、SNS などにある顔が見えない状況におけるトラブルを避ける意味でも効果的であり、今後十分に配慮・検討する必要がある。

2 つ目として、共有する学習成果等の題材についてである。1 回目・2 回目ともに対等な立場からの率直な意見の交換により、意欲の向上やグループ内での協力体制の強化が得られた一方で、教科福祉としての特徴である福祉や介護に関する見方・考え方を広げ深めることにつながったのは、1 回目よりも、2 回目の事例を交流した時であった。今回は、両校とも夏季休業中に介護施設等へ実習を行っていたため、実習による体験をもとに事例を作成することができた。しかし、福祉を学ぶ高等学校の全てが実習を行っているわけではない。また、事例でなければ、福祉や介護の見方・考え方を広げ深めることはできないのだろうか。現在、考えられるものとして、抽象的な概念に対する問いを立て、意見を交流するというものがある。具体例としては「福祉とは何ですか？」という問いを投げかけ、それぞれの立場から考える「福祉」を出し合う。この活動を通して、福祉を学ぶ自分たち高校生が考える福祉だけでなく、福祉を学んでいない高校生や小中学生が考える福祉、周りの大人たちが考える福祉、教科書や文献にある言葉の定義としての福祉などにふれ、福祉という抽象的な概念を捉え直し、福祉の見方・考え方を広げ深める機会にできるのではないか。この方法であれば、介護施設等へ実習に行っていないなくても、福祉を学んでいないなくても、福祉や介護の見方・考え方を広げ深められる可能性があるため、今後、実施・検討していく。

本論文は、令和元年度日本学術振興会奨励研究の報告内容の一部である。

## 謝辞

ピア・レビューを行うにあたり、協力校として三重県立鳥羽高等学校 高田弘子教諭、同校教科福祉選択者 3 年生の生徒のみなさんに、感謝申し上げます。

## 注

<sup>i</sup> 令和元年 8 月に文部科学省から出された令和元年度学校基本調査（速報値）によると、「小学校は、636 万 9 千人で、前年度より 5 万 9 千人減少し、過去最少。中学校は、321 万 8 千人で、前年度より 3 万 4 千人減少し、過去最少。高等学校は、316 万 8 千人で、前年度より 6 万 7 千人減少」となっており、継続的な生徒数の減少が見込まれる。

<sup>ii</sup> 新高等学校学習指導要領にある福祉科の目標とは、次の通りである。

福祉の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、福祉を通じ、人間の尊厳に基づく地域福祉の推進と持続可能な福祉社会の発展を担う職業人として必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

（１）福祉の各分野について体系的・系統的に理解するとともに、関連する技術を身に付けるようにする。

（２）福祉に関する課題を発見し、職業人に求められる倫理観を踏まえ合理的かつ創造的に解決する力を養う。

（３）職業人として必要な豊かな人間性を育み、よりよい社会の構築を目指して自ら学び、福祉社会の創造と発展に主体的かつ協働的に取り組む態度を養う。

文部科学省（2018）高等学校学習指導要領 p.569

## 参考文献

- 中央教育審議会（2016.12.21）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」  
 角谷道生・森脇健夫（2019）「高校教科福祉におけるピア・レビューを用いた「授業」づくりの効果と検証」三重大学紀要三重大学教育学部研究紀要 第 70 巻 pp.381-390  
 角谷道生・森脇健夫（2020）「高校教科福祉におけるピア・レビューを用いた動画を含む「授業」づくりの効果と検証」三重大学紀要三重大学教育学部研究紀要 第 71 巻 pp.111-222  
 角谷道生（2020）「高校教科福祉における対話的事例シナリオを用いた授業の効果と検証」人間と福祉第 9 号  
 文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領」  
 文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領 解説福祉編」  
 田代 久美・成田 忠雄（2002）「マップ型学習調査システム利用による総合的な学習「バリアフリーのまちづ

くり」の開発・支援」電子情報通信学会技術研究報告.  
ET, 教育工学 101(609)pp.33-8  
山田康彦・森脇健夫・根津知佳子・赤木和重・中西康  
雅・大日方真史・守山紗弥加・前原裕樹・大西宏明(2018)  
『PBL事例シナリオ教育で教師を育てる—教育的事象  
の深い理解をめざした対話的教育方法—』三恵社